和歌山県

熊野本宮大社旧社地大斎原
試掘調査報告

－新宮川小規模河川改修に伴う試掘調査－

1996

財団法人　和歌山県文化財センター

926

凡　　例

1　本書は、1996年１月８日～同年３月25日に実施した和歌山県東牟婁郡本宮町熊野大社旧社地大斎原確認調査報告である。

2　調査は、和歌山県新宮土木事務所から委託を受け、和歌山県教育委員会の指導の下に財団法人和歌山県文化財センターが行った。

3　発掘調査にあたり、熊野本宮大社、和歌山県新宮土木事務所、同本宮駐在、和歌山県立博物館に御協力を頂きました。記して感謝する次第です。

4　調査ならびに本書の執筆・編集は松下彰が担当した。

目　　次

発掘調査の経緯と大斎原……1

試掘調査について……2

各トレンチについて……2

まとめ……5

挿　図　目　次

図１　本宮町位置図……1

図２　熊野本宮旧社地位置図……1

図３　地形断面模式図……2

図４　第２トレンチ　根石状石組遺構……3

図５　トレンチ配置図……3

図６　トレンチ平面図・断面図……6

写真図版目次

ＰＬ１（上）……8

（下）……8

ＰＬ２（上）……9

（中）……9

（下）……9

財団法人 和歌山県文化
年　月

発掘調査の経緯と大斎原

この試掘調査は、音無川河川改修予定に伴って新宮土木事務所の依頼によって行われたものである。

試掘調査の対象地は、熊野川の支流の音無川左岸で、熊野大社旧社地大斎原西部である。大斎原は、熊野川を本流として支流の音無川、岩田川の合流する中洲に熊野本宮大社が鎮座していた。（図１）

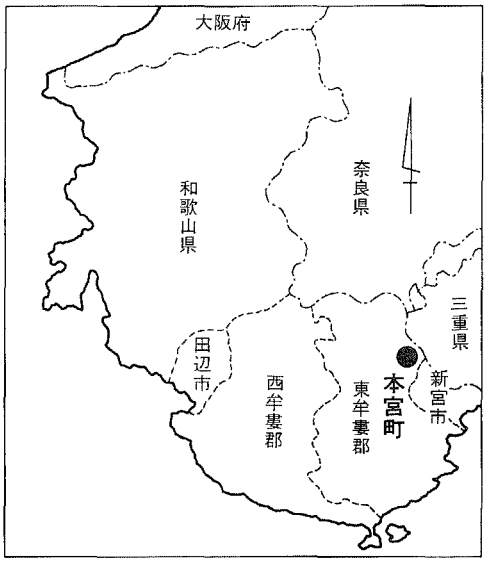


図１　本宮位置図

しかし、明治22（1889）年の水害で社殿は、ことごとく流出したが、現在は江戸時代に築かれたと思われる社殿の主体となる広い範囲に、切石の基壇が良好に残っている。

この大斎原は、中州という立地によって大雨によって、たびたびの冠水にあっている。このことによって熊野本宮大社は、明治22（1889）年の大水害の際に大斎原から現在地に遷祀再建されたものである。

音無川は、かつて熊野街道中辺路から、音無川上流に出て、発心門、水呑、伏拝の各王子社を経て本宮に至る。参詣者は、この音無川を徒歩で社地に入る「ぬれわらじの入堂」をする潔斎垢離の場として重要であった。

この、音無川を渡って旧社地を拝することになる。

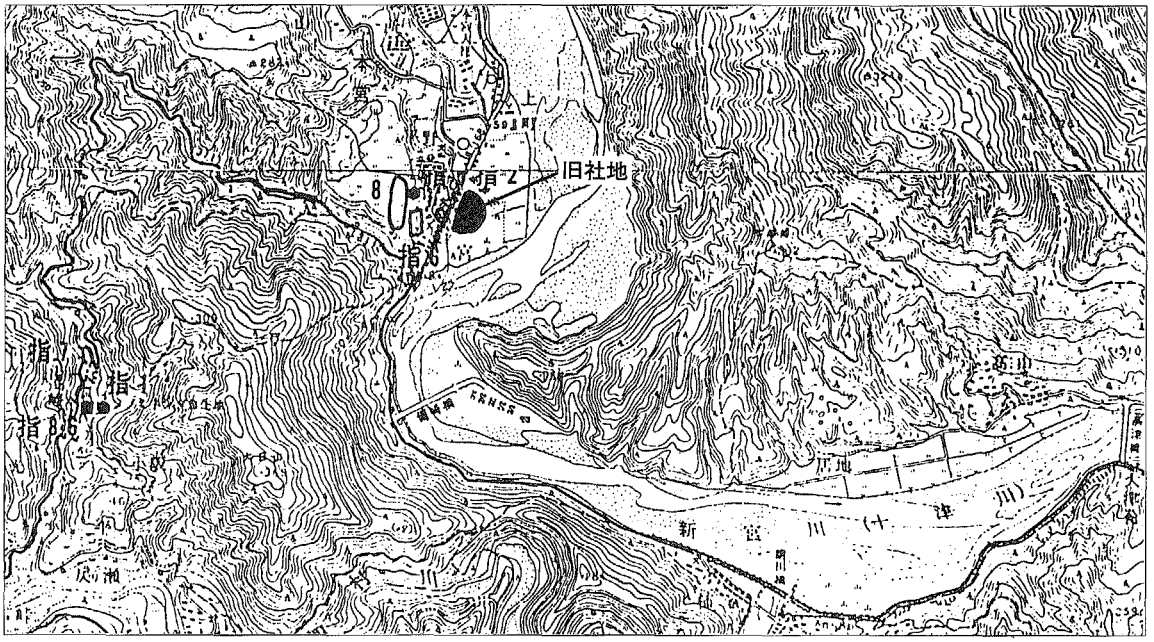


図２　熊野本宮旧社地位置図

試掘調査について

この調査において6箇所のトレンチを設定した。これらを北から南方向の順に、各トレンチを第1トレンチ～第6トレンチとした。(図2)

なを、石垣をはさんでのトレンチ、あるいは当初設定したトレンチを分割したものについては枝番号をつけた。

調査面積は、237㎡である。

発掘の対象となっている地形は、音無川の段丘部から土堤部にかけての範囲である。
古絵図では、木橋がかかっていた付近である。

なお、現在の鳥居から旧社地を渡る橋を境にして、北側は石垣は無く、南側には石垣を積んでいる。各発掘地点の呼称は、説明上の呼称であって、実際の地形の判断ではない。

実測は、各トレンチの地表から任意に基準線を設定して行った。

各トレンチについて

1　第1トレンチ

このトレンチは、土堤部から段丘部にかけて設定した。土堤部は砂層で、段丘部は礫層である。土堤部から段丘部にかけて、褐色砂層に礫層が、礫層の上に黒色土が重なっている。

土堤部の表土下約2ｍで、粘質土になり、約3.5ｍで径30cm程の川原石が散見するが、礫の層にはなっていない。

遺物の出土はまったく無い。

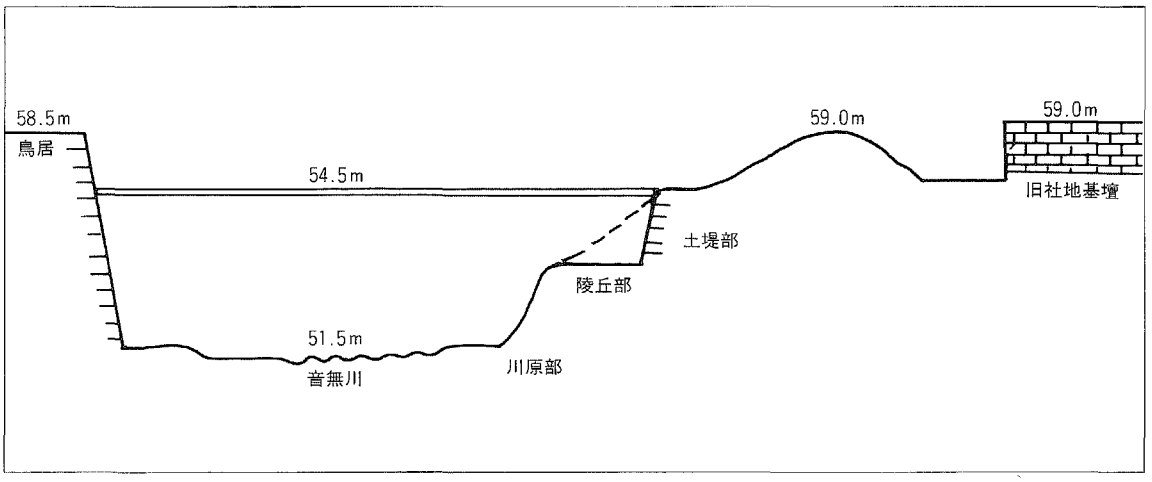


図3　音無川断面模式図

2　第2トレンチ

このトレンチも、第1トレンチと同様土堤部から段丘部にかけて、トレンチを設定した。土堤部の地表から約1.5mで、根石状石組遺構が二基検出された。この遺構は、川原石と割石(ケンチ石）を利用したものである。堀方は不明である。石組の中心に空間を設けている。

遺構は、褐色粘質土層内にあり、幅50cmのトレンチを両者の間に設定した。

この面から深さ25cmで、砂利層であり、第1トレンチと異なった地層である。

3　第3トレンチ

石垣を介して土堤部の第3トレンチー1と段丘部の2にわけて発掘した。第3トレンチー1の地層は、第1トレンチによく似ている土層の堆積をしている。

上層から褐色砂層、薄い灰色粘土層、灰褐色砂層で、遺物の出土はまったくみられない。

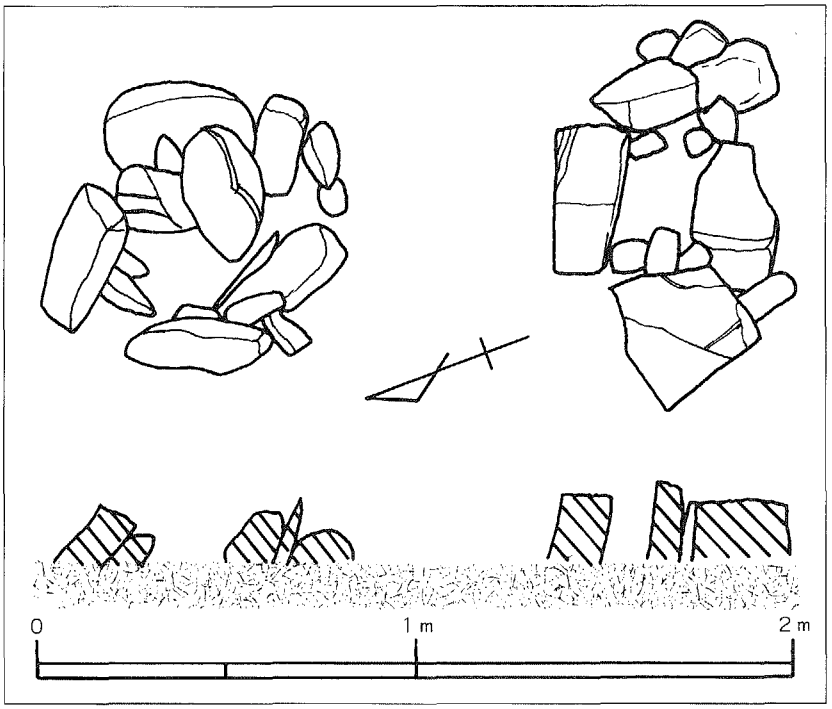


図4　第2トレンチ根石状石組遺構

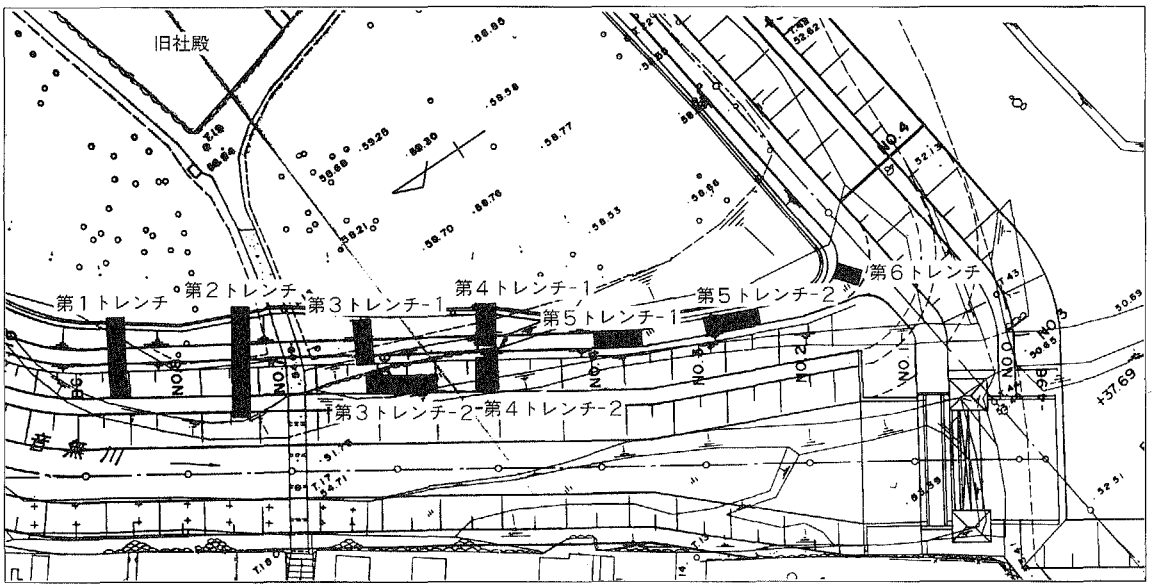


図5　トレンチ設定図

第３トレンチ－２は、段丘部で、礫層、褐色土層(礫混)、褐色砂層、黒色土層からなっている。南壁断面をみると、礫のレンズ状堆積が顕著であり、氾濫によって形成された様相がうかがえれる。

4　第４トレンチ

このトレンチも石垣を介して第４トレンチ－１と２に分割して調査をおこなった。

第４トレンチ－１は、表土から約１ｍで、河川の氾濫の際の、流木が横倒しの状態で検出された。

石垣の手前約１ｍでは垂直に、褐色砂層を切って礫層に変化している。石垣を構築した時の地業であろう。

第４トレンチ－２は、褐色土層の下層は礫層である。

5　第５トレンチ

このトレンチは、南北に北のトレンチを第５トレンチ－１とし、南のトレンチを第５トレンチ－２とした。いづれも段丘上であり、前者の層位は、上層から褐色土層、礫層、褐色砂層となっている。第５トレンチ－２は、より単純な堆積である。

6　第６トレンチ

段丘と河川敷きの不明瞭な地点で、褐色土層によって形成されている。

まとめ

地層について

基本的には、土堤部は褐色砂層、次に灰褐色粘土層であることが、第１トレンチ、第３トレンチ－１、第４トレンチ－１からうかがえる。

段丘部は、ほとんど礫層で、地表50cm下からゴルフボール、ポリ容器類がでてくる。

出土遺物について

明治時代を含めてまったく無い。

遺構について

第２トレンチ土堤部の二基の根石状遺構が、唯一のそれらしいものであるが、その機能とするところのものについては不明である。

遺構の時期について

遺構の時期については、それに関連する遺物が一切出土していないので不明であり、砂層の形成過程についても明瞭なる資料を得ることはできなかった。しかし、この遺構の部分の下層は小トレンチによって玉砂利層であることが確認され、他の土堤部とは異なった土層となっており、人工的な地業の可能性を残している。

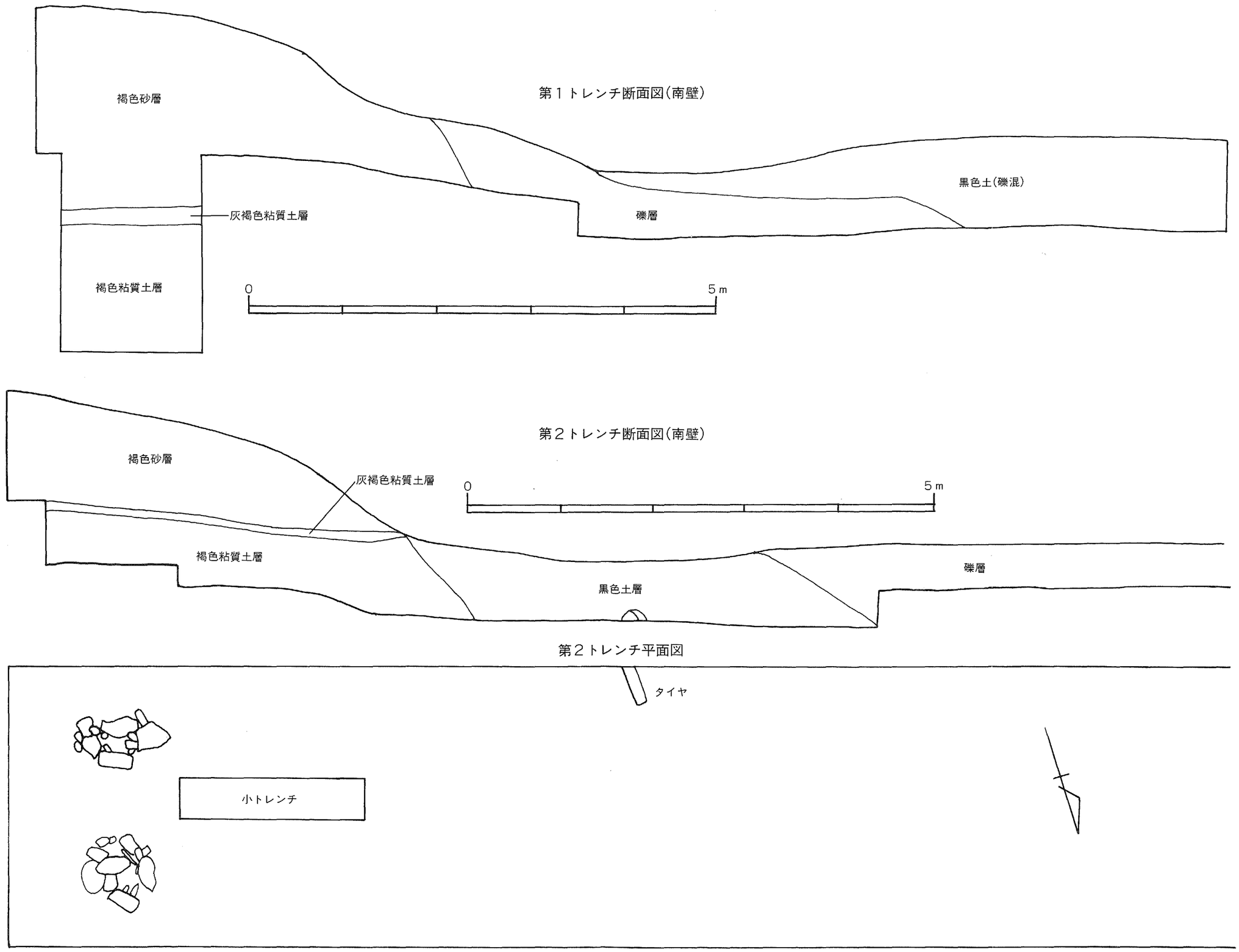


図６　第１トレンチ断面図・第２トレンチ断面図、平面図

PL 1

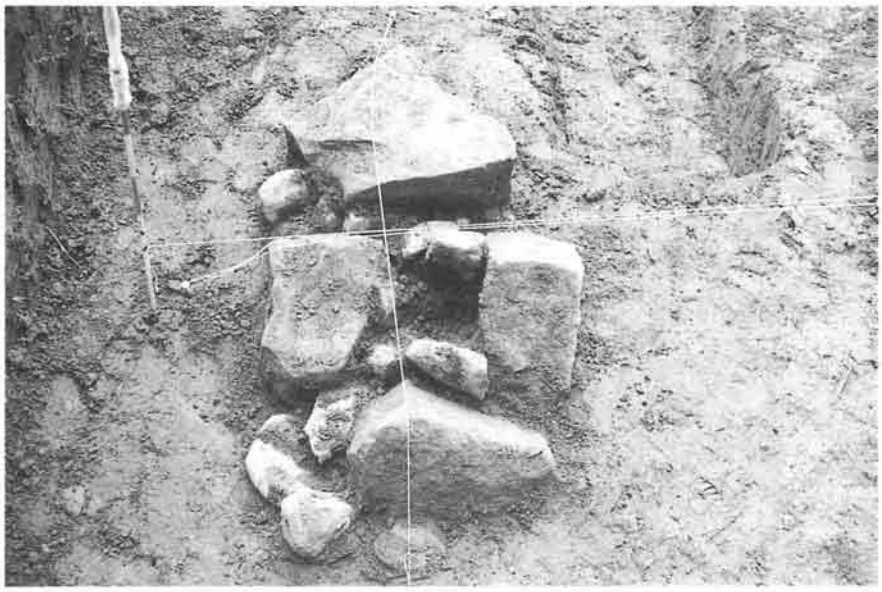
版本　熊野大社本宮社頭図（和歌山県立博物館蔵）

本宮旧社地（南より）

PL2

第２トレンチ深掘部

第２トレンチ根石状石組遺構Ａ



第２トレンチ根石状石組遺構Ｂ

報告書抄録

ふりがな	くまのたいしゃきゅうしゃちおおゆのはらしくつちょうさほうこく
書　　名	熊野大社旧社地大斎原試掘調査報告
副書名	
編著者名	松下彰
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640　和歌山県和歌山市広道２０番地　TEL 0734-33-3843
発行年月日	西暦　1996・3

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
熊野本宮旧社地大斎原	本宮町湯峯	42630		33度50分	135度52分	19960104～19960325	237	河川改修に伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊野本宮旧社地大斎原	旧社地	奈良時代～明治時代	根石状石組遺構	無し	中州中心部は各時代を通じ社殿が存続し、熊野権現信仰の中心でもあった。

熊野本宮旧社地大斎原
試掘調査報告

-新宮小規模河川改修に伴う試掘調査-

1996・3

編集発行 財団法人　和歌山県文化財センター

印　　刷 株式会社　和歌山印刷所